

資料 1

「2022 62nd ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS」

各部門 審査委員長紹介およびメッセージ

■フィルム部門 細川 美和子 氏



(つづく)

CREATIVE DIRECTOR / COPY WRITER

【プロフィール】

グループ・クリエイティブ・ディレクターを経て、2021年電通から独立。2022年1月クリエイティブ・ディレクター・コレクティブ（つづく）を設立。言葉を中心に、広告とPR、マスとソーシャルをかけあわせ、世の中と関係を作りながら、長く愛される物語のあるブランド作りを志す。

【受賞歴】

カンヌゴールド、アドフェスグランプリ、ONE SHOW、ACC グランプリ、TCC、朝日広告賞グランプリ、日経広告大賞、フジサンケイグループ広告大賞、ギャラクシー賞など

【審査委員歴】

カンヌフィルム審査員、アドフェスフィルム審査員、スパイクスフィルム審査員、ACC 審査員、TCC 審査員など

【主な作品】

アテント「#常識をはきかえよう」、パンテーン「#この髪どうしてダメですか」、東京ガス「家族の絆」シリーズ、グリーンダ・カ・ラ「やさしいのがいちばん」、ピュアセレクト「ずっとピュアでいよう。」、Glico「smile.Glico」、日向市「ヒュー！日向 / Phew!HYUGA」など。

【メッセージ】

未来を想ってだれかが懸命に作った道が、閉ざされないように。ここに道ができてよ、と多くの人が気づき、次につながられるように。

広告表現、そして広告の役割そのものへのチャレンジを見落とさずに評価したいと思いました。

そのためにも審査委員は今日も広告制作の現場でいいものを作り続けている方であることはもちろん、性別、年齢、所属先などできるかぎり多様な方々にお願いしました。

今年広告制作に関わった人々のあらゆる奮闘を見落とさないためにも、さまざまな視点が必要だと思ったからです。

そしてこの時代に広告の存在意義、そして広告賞の存在意義を問いつけるためにも。

あなたの絶え間ないチャレンジの結実を、ぜひ応募してください。

■フィルムクラフト部門 多田 真穂 氏 ※新設

**電通クリエイティブ X、Dentsu Craft Tokyo**
執行役員、エグゼクティブプロデューサー

1991年 電通プロックス（当時の名称）入社。プロダクションマネージャーを経てプロデューサーとなり、CMを中心に、映画・ドラマ・MV・ショートフィルム・テレビ番組など、多種多様な映像制作に携わる。

ACC・CANNES・ADFEST 他受賞。

Suntory オールフリー／オレンジナ／「話そう。」／飲食店支援キャンペーン等担当。

2015年 電通クリエイティブ X 執行役員就任をきっかけに、映像制作から拡張したプロダクションの新しい未来像を思い描き、「Dentsu Craft Tokyo」を立ち上げる。

「Dentsu Craft Tokyo」では、テクノロジー・デザイン・プロデュース、各領域のトップクリエイターが会社の枠組みを越えて中目黒オフィスに同居し共創し、着想力と実現力の両方を強みに、常に新しいソリューションにチャレンジしている。

「世の中の人にちゃんと見てもらえる、心を動かすことができる、アクションにつながるができる、そんなコンテンツを制作したい、制作できる人やチームを育てたい、そんな会社でありたい。」 私は、毎日そればかりを考えています。

【メッセージ】

広告領域の変化に伴い、「クリエイティビティ」の概念が多様化している今、従来の意味の「クリエイティビティ」の評価に対して、私は昔より距離を感じてしまっています。必要以上に昔を懐かしむ必要はありませんが、弊社や私の周りの制作スタッフの「感じ」を正直に申し上げますと、ACC 賞へのモチベーションが年々薄れてきているようではありまして、そのことはとても残念に思います。

「日本最大級のクリエイティブアワードである ACC 賞は、制作に携わる全員が目指すものでなければならぬ。」そのような思いから今年、「フィルムクラフト部門」が新設されました。

また、これまでフィルム部門にて審査されてきました「クラフト賞」である制作スタッフ他の個人賞につきましては、そのまま「フィルムクラフト部門」にて引き継ぎ、作品賞とは別に、個人にも特化して贈賞させていただければと考えています。

さらに申し上げますと、まず今年はフィルム（動画）クラフト部門から立ち上げ、いずれは他領域のクラフト部門についても検討していこうと、ACC アワード改革委員会の皆様と話し合いを続けています。

私はこの度、誠に僭越ながら「フィルムクラフト部門」審査委員長を拝命致しました。私は、「クラフト」のクリエイティビティに特化して評価することは、必ず制作スタッフの技術向上や人材育成の未来につながると信じており、少しでもそれに貢献できればと考えています。少なくとも弊社の若手社員には、もっと ACC 賞を目指してほしいと思いますし、受賞者に嫉妬してほしいと思います。

審査委員は、様々な制作技術スタッフの皆様をお願いできればと考えています。すぐく豪華なオールスタッフ打合せをプロデューサーとして仕切らせていただくスタンスで、審査会に臨めればと思います。各ポジションのプロフェッショナルの皆様と制作クリエイティブについてディスカッションできることが、今から本当に楽しみです。

■ラジオ&オーディオ広告部門 古川 雅之氏 ※新任



電通関西支社

グループ・クリエイティブ・ディレクター、CMプランナー、コピーライター

【プロフィール】

1969年九州生まれ、大阪育ち。

グラフィックプロダクション、(株)大広を経て99年電通入社。

【受賞歴】

ACC テレビグランプリ 2010 (梅の花) /ACC ラジオグランプリ 2019・2021 (キンチョウ) /TCC グランプリ 2017 (赤城乳業) /TCC グランプリ 2020 (キンチョウ) /クリエイター・オブ・ザ・イヤー特別賞 2017/ 佐治敬三賞 /アドフェストグランデ (赤城乳業) /JAA 消費者のためになった広告グランプリ (赤城乳業) /日経広告賞大賞 /読売広告大賞グランプリなどに当選。

【主な仕事】

大日本除虫菊 (キンチョウ) /TVCM: キンチョール、虫コナーズ、ゴンゴン、ムエンダー、コバエがポットン、ティンクル、サンポールなど。新聞広告: 「超難解折り紙」「新元号キンチョール」「もうどう広告したらいいかわからない」「一方通行」など。R-CM: 「いま聞きたいストーリー」「G作家の小部屋」「なな子と光三郎」「Hさんの話」「虫コナーズで名言を」など。赤城乳業 /TVCM: ガリガリ君「値上げ広告」、BLACK (ゆるメーション)、ミルクレア (わしもないねんおじさん)、ソフ (なぜか上だけおじさん)、ガツン、とみかん (リモートガツン) など。日清紡 /TVCM: ドッグシアター (犬の二人羽織)、クマーシャル劇場。福井新聞 / 家族で話そう。など

【メッセージ】

いま、どういう音で、言葉で、アイデアで、リスナーの耳を捕まえたのか、心を揺さぶったのか。

審査委員長の仕事の9割は、審査委員選びだと言われています。

審査委員選びとは、「この人に選ばれたい」という人を選ぶことだと聞きました。

こうなりました。どうでしょう。

いいものが選ばれることだけはもう決定した、と言えらと思います。

Bカテゴリーは、何をもちてBなのか問題があるかもしれません。

今のところAではないもの、Aには含まれない音声 (コンテンツ) ということになっています。

明文化がむつかしいということは、まだまだ自由だということです。

「これはBだろうか?」と、もしかしたら首を傾げながら出品したものがBカテゴリーを作っていく、つまりこれからの受賞作がBカテゴリーを浮き彫りにしていく、ということかなと思います。

「これはBだろうか?」と思ったら、おそらくBです。

試しに、応募してみてください。

迷ったら、事務局に聞いてみてください。

喜ぶと思います。

■マーケティング・エフェクティブネス部門 簗部 敏彦 氏 ※新任



花王

作成センター コミュニケーション作成部 コミュニケーション作成部長

【プロフィール】

コピーライターとして花王株式会社に入社。

ヘアケア、スキンケア、ヘアコスメ、ファブリックケア、ホームケア、化粧品などの各ブランドや RecyCreation など、コミュニケーションの企画制作を担当。

2017 年よりクリエイティブディレクターを務め、部長（ファブリック & ホームケア担当）を経て、2020 年 1 月より現職。

【主な仕事】

アタック Neo、アタック ZERO、キュキュット、ソフィーナ iP のローンチのコミュニケーション開発。キュキュットのブランド名や、「すすいだ瞬間、キュキュットと落ちてる」コピー開発など。

【審査委員歴】

2018 年～ 広告電通賞 選考委員

2020 年～ ACC TOKYO CREATIVITY AWARDS ME 部門 審査委員

【メッセージ】

人や社会にどんな幸せを運んだ仕組みやアイデアだったのか。これまで審査委員として関わらせていただいて、ME 部門の熱い議論の行きつく先はそこにあると感じています。

うれしい、たのしい、ジンとする。幸せといっても千差万別で、その戦略や施策で人が動いたときに、どんな感情やココロの揺らぎを生んだのか、ともいえるかもしれません。そして審査では、マーケティング、クリエイティビティ、リザルトと多くの視点や角度の意見が飛び交いますが、真剣な議論の最後には、私たちも幸せな気持ちになっています。

人とふれあう温かさといった本質的な価値の気づきや回帰、あるいはつぎへの転換期の変化の真ただ中で、規模の大小や期間の長短に関わらず、幸福感を生んだ施策をぜひ応募いただければと思います。

■ブランデッド・コミュニケーション部門 橋田 和明氏

**HASHI**

クリエイティブディレクター

【プロフィール】

1980年東京都北区赤羽生まれ。

2002年、東京大学経済学部卒業後、博報堂に入社。

ストラテジックプランニング局を経て、2006年に博報堂ケトル設立メンバーに。

2018年にHASHI inc.を設立。現在は、PR視点で統合キャンペーンをつくるクリエイティブディレクターとして幅広い業務に従事。

【受賞歴】

ADC / クリエイター・オブ・ザ・イヤー・メダリスト / ACC / 12 Cannes Lions / 4 Adfest Grand Prix / D&AD イエローペンシル / NYADC / Oneshow / Clio / LIAA / PR アワードグランプリ / 日経新聞広告賞 最優秀賞 / 毎日広告デザイン賞 最高賞など

【審査委員歴】

CANNES LIONS PR 部門、SPIKES ASIA PROMO & DIRECT 部門、ACC BC 部門、YoutubeWorks Creative Effectiveness 部門など

【主な作品・お仕事】

サントリースピリッツ 翠ジンソーダキャンペーン、
Yahoo! JAPAN「ちょうどこの高さ。」 / 「さわれる検索」、
資生堂企業広告「50 Selfies of Lady Gaga」など

【メッセージ】

続いている世の中の不安に対して、クリエイティビティが何ができるか、という大きな問いに対しては、そのものを解きにいくのではなく、みなさんの目の前の仕事から答えが生まれてくるものだと思います。だからこそ、ブランデッド・コミュニケーション部門のビジョンは、ブランドや社会に真摯に向き合い、クリエイティビティを発揮して結果を出しているコミュニケーション（広告）をちゃんと褒めることです。そして、同じ業界の仕事なのに部門やカテゴリーがないから褒められていない仕事や才能を発見して褒めることです。

今年もみなさまのご応募をお待ちしております。

■デザイン部門 太刀川 英輔 氏 ※新任

**NOSIGNER CEO****JIDA(公益社団法人日本インダストリアルデザイン協会)理事長****進化思考提唱者****2025 大阪関西万博日本館基本構想クリエイター**

【プロフィール】

未来の希望につながるプロジェクトしかしないデザインストラテジスト。

SDGs、再生可能エネルギー、地域活性などの数々のプロジェクトでデザインと総合的な戦略や事業構想を描く。

デザイナーとして、インダストリアルデザイン、グラフィック、建築などで高い表現力を発揮し、これまでにグッドデザイン賞金賞、アジアデザイン賞大賞、ドイツデザイン賞金賞他、国内外を問わず 100 以上のデザイン賞を受賞。グッドデザイン賞、ACC 賞、DFAA (Design for Asia Awards)、WAF (World Architecture Festival) 等の審査委員を歴任。日本で最も歴史ある全国デザイン団体、JIDA の理事長を歴代最年少で務める。

産学官の様々なセクターの中に変革者を育むため、生物の進化という自然現象から創造性の本質を学ぶ「進化思考」という新たな教育法を提唱。この進化思考は生物学者・経済学者らが選ぶ日本を代表する学術賞「山本七平賞」を受賞し、ベネッセ主催の「高等教育の未来を考える」委員会にて座長を務めるなど、本質的な創造性教育への更新を目指している。

主なプロジェクトに、OLIVE、東京防災、PANDAID、山本山、横浜 DeNA ベイスターズ、YOXO、2025 大阪・関西万博日本館基本構想など。

著書に『進化思考』（海土の風、2021 年）『デザインと革新』（パイ インターナショナル、2016 年）。

【メッセージ】

美しいプロジェクトは、固定観念を塗り替えるもの。100 年前のスペイン風邪(コロナウィルスのパンデミック)後のモダニズムでも、第二次大戦後のミッドセンチュリーでも、社会の代案となるプロジェクトの出現こそが、デザイン本来の姿でした。カオスを生きる今世紀の中で、社会はそんなデザインの本来を思い出しつつあります。

美しいプロジェクトは例外なく、デザインの高い表現力とテクノロジー、経営や未来へのビジョンを混ぜ込んだスープから生み出されるもの。この融合の中では、分類できないデザインも増えています。ACC 賞デザイン部門は、こうした未来へのプロジェクト性を高く評価する賞です。

これまでの 2 年間、この部門は多くの感動的なプロジェクトに出会いました。今年はどんなデザインの出現を祝い、その運動を応援できるのでしょうか。皆様のご応募を楽しみにしています。

■メディアクリエイティブ部門 中谷 弥生 氏



TBS テレビ

総合編成本部 DX ビジネス局長

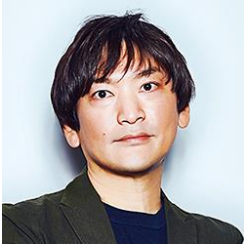
【プロフィール】

1992年 TBS 入社、朝の情報番組の AD（アシスタントディレクター）・D（ディレクター）を経て、報道局政治部の記者として官邸や自民党等を担当。その後、メディアビジネス局で、テレビコンテンツや映画のキャンペーン・販促企画を手掛ける。その後、編成局編成部、営業局営業推進センター長、メディアビジネス局長を経て現職

【メッセージ】

メディアクリエイティブ部門は、広告表現や番組の優劣を競うのではなく、「メディア×アイデア」の独自性・独創性のクリエイティビティを重視します。「独創性」「前提を覆す」「新しいチャレンジ」と言いますと、応募される方からは大変ハードルが上がってしまうと思いますが、昨年の審査会でも「この予算でよく仕掛けた！」「みんなで集まれる場所を作った！」「1人の熱意が凄い！」「ただ単に好き！（笑）」などと、クライアントの皆様、広告会社さん、テレビ・ラジオ・デジタル・雑誌など媒体のメンバーと立場が異なる人々が、正解のない中、本当に丁寧に審査頂きました。又、「エリア&コミュニティ賞」は狭いエリアで全く構いません。若いクリエイターの皆さん！今年も、皆様の考え抜いた「仕掛け」を、熱く丁寧に議論していきたいと思いますので、自信がなくても是非是非、ご応募いただければと思います。

■クリエイティブイノベーション部門 中村 洋基 氏 ※新任



PARTY Creative Director / Founder
ヤフー メディアカンパニーMS 統括本部 ECD
電通デジタル客員 ECD
combo 代表取締役

【プロフィール】

2000年より電通で、斬新なアプローチのバナー広告を次々と発表し、インタラクティブCDを経て独立・PARTY共同創設。「ナラティブとテクノロジーで未来の体験をつくる」をミッションに掲げる。コミュニケーションを活用し爆発的にシェアを産むキャンペーンが得意。

東京FM「澤本・権八のすぐ終わりますから」毎回ゲスト。文化放送「アニソンPARTY!」プロデュース。表参道のコーヒーショップ「TINTO COFFEE」経営。自分の価値を売買できるサービス「VALU」発起人。

起業家・投資家としてスタートアップの投資・支援を数多く行っているが、上場株に投資するとなぜか暴落する。

【受賞歴／審査委員歴／主な作品・仕事】

Cannes Lions グランプリ、One Show、D&AD、ADFEST など国内外 300 以上を受賞。

Cannes Lions、D&AD、One Show など国内外のアワードの審査員を歴任。

予防医療普及協会理事

主な仕事に「スラムダンク あれから 10 日後」「ジャンプフェスタ ONLINE」RADWIMPS「SHIN SEKAI」「バレンタインポスト」「UNIQLO LUCKY SWITCH」「Ole!Ole!CR-Z」「TEHAI」など。

事業に「VALU」「combo」。

【メッセージ】

この部門は「ビッグアイデア×テクノロジー」のプロダクトやサービスを評価します。

- ①企業の新規プロジェクト
- ②創造性の高いスタートアップ
- ③クラウドファンディングや研究機関などプロトタイプ
- ④その他、なんか斬新すぎてどの部門にも応募しづらいものを、応募してください。

昨年度は、国交省が全国の都市モデルをオープン化する「PLATEAU」や、都市部に急速に広まっているシェアサイクル「LUUP」、テレビを舐めるという空前絶後の UX「味わうテレビ」など、新たな地平がかいま見えました。

コロナ禍によるリモートの急激な発達、Web3、メタバース、NFT……と、新たなビジネスや課題解決のチャンスはそこここに。

「えっ?これうち、応募していいの?」と思ったあなた。大丈夫です。ぜひ!

あなたの応募が、この賞の未来を変えます。